

## 研究ノート

## 中国におけるオーケストラの展開

## — 租界から「文化大革命」まで

近 藤 宏 一\*

## 要旨

中国（ここでは香港、マカオ、台湾を除く）における最初期のオーケストラは、上海公共楽隊（1870年ごろ設立）、北京のハート楽隊（1886年）、ハルビンにあった東清鉄道の鉄道クラブ楽団（1908年）があげられるが、いずれも居留する外国人が自分たちの娯楽のために設立したものであった。ハート楽隊を除くと楽団員もすべて外国人であった。

ハート楽隊の中国人楽団員の一部は1920年代に中国人音楽家によって設立された北京大学管弦楽団などに参加しているが、中国人および中国の組織によるオーケストラの組織が広がるのは1930年代からである。そして、1941年に重慶で設立された中華交響楽団が、中国の組織による、中国人演奏家によって構成された大規模なオーケストラとして活発に活動したことが注目されている。

中華人民共和国の建国後は、上海工部局楽団を継承した上海交響楽団や、国家を代表するオーケストラとしての中央楽団交響楽隊が積極的に活動したのはもちろん、各省にも歌舞団が設置され、そのなかにオーケストラも含まれていた。これらの文化芸術組織は、政治的プロパガンダの目的はもちろん、一般市民の文化生活の向上も重要な課題としていたことから、オーケストラは革命的音楽だけでなく西洋クラシック音楽も積極的に演奏し、中国国内での音楽家養成の本格化や楽団の組織的整備によって活動も活発化していった。また、映画製作所や放送局にもコンテンツとしての音楽を演奏するためのオーケストラが設置されたが、これらも独自の演奏会を開くなどしていた。しかし、「文化大革命」が始まる頃から演奏曲目への制約が大きくなるなど、オーケストラには厳しい環境となり、この後再び活動が活発になるのは主に1980年頃からである。

## キーワード

中国のオーケストラ、上海交響楽団、ハルビン交響楽団、中華交響楽団、中央楽団

---

\* 立命館大学経営学部教授

## 目 次

1. 前史：建国前中国大陸におけるオーケストラの展開
    - (1) 最初期のオーケストラ
    - (2) 中国人によるオーケストラ
    - (3) 日本の敗戦から国共内戦期にかけてのオーケストラ
  2. 建国後のオーケストラ拡充
    - (1) 主要楽団の発展
    - (2) 地方楽団の設立
    - (3) 各種の伴奏楽団や民族楽団などの設立
- おわりに

21 世紀に入ってから、ピアニストのラン・ランをはじめ中国出身の演奏家は急速に世界のクラシック音楽界でその存在感を高めてきていたが、それに続き近年、国際的な場に登場する中国のオーケストラもうまれてきた。たとえば中国フィルハーモニー楽団は 2014 年夏にロンドンの有名な音楽祭である BBC Proms に登場し、喝采をうけている。上海交響楽団には、今年 NHK 交響楽団の音楽監督となったパーヴォ・ヤルヴィをはじめ、世界的指揮者が繰り返し客演している。

本稿では、現在の中華人民共和国（香港・マカオを除く）におけるオーケストラの経営について検討する前段階として、中国のオーケストラが建国後いわゆる「改革開放期」の始まる前までにどのような展開を行ってきたかを、各オーケストラの「団史」などを参照しながら概観する。

なお、各オーケストラの名称や中国語文中ではオーケストラをさして「楽団」と「楽隊」の二つの単語があてられている。「楽隊」は日本語の場合小規模な編成がイメージされやすいが、中国では二管編成以上の規模をもつものもあり、一概にいけない。また、「中央楽団交響楽隊」や「省歌舞劇院管弦楽隊」のように、合唱団、民族楽団、歌劇団などいくつかの舞台芸術組織を包摂する団体を「楽団」「歌劇団」「歌舞劇院」と称し、それに属するオーケストラに「楽隊」をあてることも多いが、この場合でも「省歌舞劇院交響楽団」といった名称になっている場合があり、必ずしも一貫していない。このため、本稿ではすべて原資料の中国語表記に沿って表記した。また、西洋音楽における管弦楽団の形式をもつ演奏団体を「オーケストラ」とし、こうした演奏団体に属する音楽家を「楽団員」と表記する。また、本文中の資料名と人名は原資料に沿って表記したが、その他については日本漢字で表記した。

## 1. 前史：建国前中国大陸におけるオーケストラの展開

まず最初に、前史として中華人民共和国建国以前の中国大陸におけるオーケストラの活動に

ついて概観しておきたい。このうちハルビン交響楽団と上海交響楽団については日本語で文献が刊行されていることもあって日本でも比較的知られているが、この二つは後述するようにいずれも外国人によって組織された、主に外国人演奏家によるオーケストラである。これに対して近年中国では、中華交響楽団など中国人自身によって組織されたオーケストラについて注目されるようになってきているが、日本語でのまとまった記述は少ない。これらについて中国におけるオーケストラ音楽の作品、作曲家、演奏団体についての事典である『中国交響音楽博覧』（梁茂春・執行主編，2010，以下「梁主編」）など入手できた資料の範囲で記述しておきたい。

### （1）最初期のオーケストラ

最初期のオーケストラは、中国在住の欧米人が自分たちの満足のために設立したものである。その源流としてとりあげられるのは、1870年代頃<sup>1)</sup>に成立した上海公共楽隊（The Public Band）と1886年設立のハート楽隊（Hart Band，中文：赫徳楽隊）である。いずれも規模や演奏活動の点で今日のオーケストラと比較できるものではなかったが、この二つを源流とするオーケストラが、後に中国人音楽家の活躍の場となっていく。なお、この2つのオーケストラの背景としてはさらに中国における軍楽隊やブラスバンドの活動をみるべきであるが、本稿の課題からは遠くなるので、ここでは省略する。

上海公共楽隊は、租界娯楽基金会在がフランス人音楽家の指揮のもとフィリピンから雇った20人の音楽家によって構成されていたが、同じ楽隊といってもここでの“Band”は吹奏楽団をさしている。1881年に租界の行政機関である上海工部局がこの楽隊を管轄下におき、1900年に正式に直接管理するようになった。1922年には上海工部局管弦楽隊（Shanghai Municipal Orchestra，以下「工部局楽隊」）が正式名称となった。ここではじめて弦楽器を含むオーケストラが成立する。（上海交响乐团，2008，pp.24-25）。工部局楽隊は1912年には33名の楽団員を擁し、1919年からイタリア人 M. Paci のもとで発展をとげていく。上海での西洋クラシック音楽に関わる活動や、工部局楽隊の活動などについては榎本泰子（1998，2006）に詳しく述べられている。

他方ハート楽隊はイギリス人 R. Hart が北京で自分の楽しみのために組織したものである。上海公共楽隊や工部局楽隊が長らく外国人演奏家のみで構成されていたのに対し、ハート楽隊は当初から天津の軍楽隊メンバーである中国人演奏家を含んでいたことが注目される。当初はやはりブラスバンドであったこの楽隊は、1890年には弦楽器メンバーも加え、小型のオーケストラとなった。1900年の義和団事件でいったん中断したが、翌年には20数名の団員で再建され、園遊会や舞踏会などに登場している（梁主編，2010，p.636）。

ハート楽隊は、Hart の帰国にともない1908年に解散したが、楽団員の一部は1914年にフランス人が開催するようになった「外洋音楽会」での楽団員となった。その外洋音楽会も資金

不足で 1919 年に活動を停止するが、蕭友梅<sup>2)</sup> がそのメンバーの一部を 1922 年に設立された北京大学音楽伝習所の教師として招聘し、これとあわせて 14 ～ 15 人からなる北京大学管弦楽隊を翌 1923 年に発足させた。同楽団の母体となったのは、1916 年に活動をはじめた学生サークルを 1918 年に大学が支援する正規の団体とした楽団である (榎本, 1998, p.30-35)。当時中国人のみで構成された唯一の楽団であるとされる (ピアノはドイツ系ロシア人の教師が担当した)。1923 年から 1927 年までハイドンやモーツァルトをとりあげて 30 数回の演奏会を開くなど活動したが、最後には奉天派軍閥の攻勢のもとで北京大学音楽伝習所が閉鎖されたため活動を停止した (梁主編, 2010, pp.612-613 and 636-637 および榎本, 1998, p.69-70)。北京ではその後 1930 年代に、清華大学が招請したロシア人音楽家によってオーケストラが組織され、戦争によって停止する 1937 年まで活動したとされる (梁主編, 2010, p.613)。建国前の北京での音楽活動については日本占領期などを含めさらに調査が必要である。

また、日本でよく知られているハルビン交響楽団の源流である東清鉄道管理局の「鉄道クラブ管弦楽団」は 1908 年に設立されている (岩野裕一, 1999, pp.25-27)。東清鉄道は中国東北部においてロシアが清朝から権利を得て建設した鉄道で、この鉄道を通じてロシアは中国東北部に大きな利権を得ていた。ハルビンもロシア人が建設した街で、鉄道関係者をはじめとするこうした外国人の娯楽のために設立されたこのオーケストラは、当然のように楽団員もロシア人を中心とする外国人であった。その後ロシア革命さらに「満州国」による日本の植民地支配という政治的激動によってオーケストラの経営基盤や楽団員構成にも繰り返し大きな変化が生じ、一時期は活動も低迷する (岩野, 1999, p.109)。しかし、ソ連が同鉄道を「満州国」に売却したことから、ハルビンの政治経済の実権を掌握した日本人たちによって、1935 年に哈爾濱交響管弦楽協会<sup>3)</sup> が設立され、それに属する交響管弦楽団があらためて設立された (岩野, 1999, p.113)。これが一般にハルビン交響楽団とよばれているオーケストラである。その後の活動などについては岩野 (前掲書) および劉学清 (2008) に詳しい。ただ、このオーケストラもエキストラでは中国人演奏家が加わることがあったようだが、正規の楽団員としては最後まで中国人が加わることはなかった。

## (2) 中国人によるオーケストラ

上述した北京での動きに続いて、1930 年代から中国人および中国の組織によるオーケストラの活動が各地で起こってくる。これは外国への留学や中国国内での音楽教育の整備によって中国人演奏家が増えてくること<sup>4)</sup> と、日中戦争の拡大によって中国における欧米人の活動に制約が強まってきたことの両方を背景とし、直接的には中華民国の中央および地方政府が文化芸術にも力をいれるようになってきたことが影響している。

このうち比較的早い段階で設立されたのは 1929 年の勵志社管弦楽隊である。これは蒋介石

が外国人の接待などのために設立した機関に付属したもので、オーケストラのほか合唱団、歌劇団を擁していた。1939年に日本軍の侵攻から逃れて重慶に移転したこのオーケストラは、1940年に、前年に設立されていた桂林放送局管弦楽隊を吸収することで、馬思聰<sup>5)</sup>のもとで本格的なオーケストラとなった。ただその後活動は衰退し、楽団員の多くは後述する中華交響楽団に加わった（梁主編，2010，pp.647-648）。また、すでに1930年には馬思聰によって広東戲劇研究所付属管弦楽隊が設立されており（梁主編，2010，p.339），1934年には江西省推行音楽教育委員会管弦楽隊が音楽教育推進運動を背景に設立されるなど（梁主編，2010，pp.643-644），この時期には地方でもオーケストラがうまれるようになった。

他方、上述の工部局楽隊では1923年以降中国人演奏家が外国人楽団員の休暇代替要員として演奏に加わることがあったが、1935年には5人の中国人がインターンとして入団し、後にこのなかから数名が正式に楽団員となった（上海交响乐团，2009，p.51，53）。しかしハルビン交響楽団では、上述のように正規楽団員に中国人はいなかった。ハルビン交響楽団のメンバーが教えていた音楽院には中国人学生もあり、満州国崩壊後のハルビンにおける音楽活動に同楽団の影響がなかったとはいえないが、その後のハルビンに設立されたオーケストラについて、上海交響楽団がそうであったような形でハルビン交響楽団との組織的・音楽的な継承性を見いだすことは難しいと思われる。

他方、国民政府の首都が疎開していた重慶では、1940年に中華交響楽団が設立された。同楽団は国民政府の行政院副院長兼財政部長であった孔祥熙らを発起人とし、宋慶齡（孫文夫人）、宋美齡（蒋介石夫人）など著名人を名誉理事に迎えており、事実上政府による設立である。馬思聰の指揮のもと6月8日に最初の演奏会を開いた（丸山貴士，2010，p.105）。楽団員は当初30～40人、最大50～60人であったと言われる（梁主編，2010，p.711）。この時期には日本軍による重慶爆撃が1939年から41年までの約3年間に195回にわたって行われ、1万人以上が犠牲となっている（前田，2006，p.436）。そのさなかにオーケストラという一見不要不急にみえる芸術組織を、政府首脳を発起人として設立するというのは、そうした切迫した情勢のもとでも文化的な営みがあることを示そうという意志の表れであっただろう。ソ連やアメリカから楽譜の供給をうけるなどしながらも、中華交響楽団は西洋クラシック作品だけでなく中国の作曲家の作品も積極的にとりあげ、中国のオーケストラとして活発に活動した。特に、今日でも演奏される「塞外序曲」など主導的役割を果たした馬の作品を多く演奏しているとされる。中華交響楽団については丸山（2010）に詳しい。またこの1940年には、中央放送事業局楽隊を母体とする国立音楽院実験管弦楽団、山東省実劇院弦楽団を母体とする国立実験劇院管弦楽団が同じく重慶に設立され、「3大管弦楽団」とよばれた。これら3つの楽団は合同演奏会を開くなどの活動を行っている（卞祖善，2010，p.15）。なお、1945年に実験管弦楽団は中華交響楽団に吸収されている（梁主編，2010，p.712）。

### (3) 日本の敗戦から国共内戦期にかけてのオーケストラ

上述のように、日本敗戦時に中国大陆で活動していた主要なオーケストラは、北からハルビン交響楽団、上海工部局楽団、中華交響楽団であるが、これらのその後の展開は大きく異なっている。

ハルビン交響楽団は日本の降伏と同時に解散した。一部のメンバーがソ連軍慰問演奏会を開いたという証言はあるが、その後楽団員は四散している。なお、この慰問演奏会を指揮した朝鮮人林元植は、後に韓国初のオーケストラであるソウル市交響楽団を組織、後には KBS 交響楽団の結成にも参画する(岩野, 1999, pp.338-340)。その後国民党の市政府が 1946 年 2 月にハルビン楽団(市政府楽隊)を組織した際には、中国人で満州国の軍楽隊に所属した演奏家などをあらためて集めた。楽団員は 50 数名で、指導者はもちろん中国人であったが、指揮者のなかには朝比奈隆の名がある。また楽団員のなかには後に朝鮮国立交響楽団の創設者となる白高山や、後に中央楽団や各地のオーケストラ、音楽学院の幹部となった者が多数含まれていた。しかしこのオーケストラは人民解放軍が国民党をハルビンから追放するなかでいったん解体した(刘, 2008, pp.85-86)。また、中華交響楽団は日本降伏後 1946 年に国民政府の首都である南京に移り活動していたが、1949 年に人民解放軍が南京に入城する直前に解散し、大半の楽団員は大陸に残ったとされるが、一部の関係者は香港に移った(梁主編, 2010, p.712)。

これに対して上海工部局楽団は戦争中も上海に残った外国人団員と中国人団員によって存続していた。1942 年以降は日本占領下で上海フィルハーモニック(音楽愛好会)管弦楽団と改称し、日本人指揮者を招聘するなどしていたが、日本敗戦後は国民党当局が接收し、上海市政府交響楽団(Shanghai Municipal Symphony Orchestra)となった。中国人の主任のもとでも指揮者や楽団員にはまだ外国人が多数いたが、国共内戦中に多くの外国人楽団員は出国し、楽団員の 3 分の 2 が中国人となった。そして 1949 年に共産党が上海を掌握してから 2 ヶ月後には演奏会を再開し、ここで実質的に戦後のスタートを切った(上海交响乐团, 2009, p.34)。

一方、延安では日本敗戦後早くも 1945 年 11 月には魯迅芸術文学院が設立されていたが、国共内戦さなかの翌 1946 年に、団長を賀緑汀とし、1 管編成のオーケストラのほか合唱団などを有する延安中央管弦楽団が設立された。1947 年に延安を離れたこの楽団は各地を転々とするが、最終的には 1950 年に北京人民芸術劇院のオーケストラの母体となった(梁主編, 2010, pp.695-696)。

## 2. 建国後のオーケストラ拡充

1949 年の中華人民共和国建国以降、首都の北京はもちろん、各地で既存の音楽組織や解放軍の文工団(後述)などを基礎として、オーケストラの設立が進められた。こうしたオーケス



トラでは、中国人作曲家の作品や革命的な音楽が多く演奏され、また各種の記念イベントでの演奏や労働者農民への慰問演奏といった、共産党のイデオロギー宣伝という役割が重視されていたのはもちろんである。しかし少なくとも 1960 年代前半ごろまでは西洋クラシック音楽も積極的に演奏されていた。1959 年には、中央楽団による建国 10 周年記念演奏会が北京首都劇場で開かれているが、そこで演奏された中国語詞によるベートーヴェンの交響曲第 9 番は、今日でも中国における西洋クラシック音楽演奏の記念碑としてしばしば言及されている。

### （1）主要楽団の発展

#### ①中央楽団交響楽隊

長らく中国を代表するオーケストラであった中央楽団は、1952 年に設立された中央歌舞団管弦楽隊・合唱隊を基礎として 1956 年に設立された。なお「中央楽団」とはオーケストラ、合唱団、ピアノなどの独奏楽器や声楽のソリストを擁する組織全体の名称で、オーケストラは「中央楽団交響楽隊」が正式名称である。

中央楽団は政府に直属し、その活動は政府と共産党の文化政策やイデオロギー政策と深く関わっていた。特に、西洋クラシック音楽の枠組みの上に中国独自の音楽芸術を創造しようとする活動において中央楽団は重要な役割を果たしており、作曲家との共同作業を積極的に行っていた。さらに、建国間もない中華人民共和国を世界にうちだしていく国際文化交流の担い手としても機能しており、1950 年代末にはソ連からの演奏家招聘、ソ連国立交響楽団との合同演奏なども行われた。国内における音楽教育のシステムが整備され、また中ソ対立まではソ連への音楽留学も多数行われたことから、中国人演奏家の技術も向上し、それを背景に中央楽団は演奏水準が向上し演奏曲目や活動内容も多様になっていったといわれる。中央楽団については、膨大な内容をもつ周光葵（2009）が刊行されているので、詳説は機会を改めたい。

#### ②上海交響楽団

ここでは、『上海交响乐团一百三十周年』（上海交响乐团，2009）をもとに、同楽団の成立と発展の経過を概観する。上述のように 1949 年に成立した上海市政府交響楽団は、市長陳毅の保護もうけて団員も拡充し、中国人作曲家の作品を積極的に演奏した。ただこの時点ではなお 56 人中 16 人は外国籍（ロシア人 7 人、フィリピン人 3 人ほか）で、演奏家がすべて中国人になるのは 1958 年である。

楽団は 1952 年には中央楽団同様に合唱団、ソリストを擁する上海楽団の交響楽隊に改組された。ところが上海楽団は 1956 年に解散し、上海交響楽団は上海文化局に属するオーケストラとして再度独立した。中央楽団が設立された頃に上海はその逆を行っていたことになるが、この理由についてはまだ調査できていない。ただ、ピアニストなど一部のソリストはその後

オーケストラに属しており、そのうちピアニスト顧圣婴はモスクワの第 6 回世界青年デー・ピアノコンクール（1957）で金賞を受賞、1960 年にはショパン・コンクールにも出場するなど、楽団との共演だけでなくソリストとしても活躍している。また指揮者も楽団の所属であり、当時は黄贻钧が主な指揮者であった。

その間の 1953 年にはベートーヴェン没後 126 周年記念演奏会の 6 回シリーズ演奏会で 4,326 人が入場、1957 年にはグリнка没後 100 周年の野外音楽会に 8 千名が来場、1959 年にはショスタコーヴィチの交響曲第 11 番（1957 年作曲）を演奏するなど、西洋クラシック音楽の系統に属する音楽を、政治的配慮はありつつも積極的にとりあげている。しかしその後、オーケストラは「文化大革命」の開始前後から大きな渦にまきこまれていくことになる。これについては地方楽団の状況とあわせて後述する。

## （2）地方楽団の設立

北京、上海という 2 大都市のオーケストラが発展するのと並行して、1950 年代中頃までに多くの省の省都でオーケストラあるいはオーケストラを含む音楽組織が設立されていった。省および直轄市が所轄するオーケストラのうち主要なものについて、上述の梁主編（2010）および各団団史、公式ウェブサイト、中国での雑誌記事、学術論文などの情報をもと表 1 に示した。これらの設立と発展、および 1960 年代における活動上の変化についてその流れを概観する。

### ①文工団から歌舞団へ

中国人民解放軍は、国共内戦期間中からイデオロギー宣伝や文化の普及、また兵士の慰問のために、文工団と呼ばれる芸術組織を軍においていた<sup>6)</sup>。これらの文工団は建国後、軍の各部隊とともに各地に配置され、各地での文化活動を担った。表 1 にあるように、多くの地方でこれらの文工団が 1950 年代中盤に省の歌舞団として再編成されているが、そのなかにオーケストラも明示的に含まれる場合があった。なお文工団だけでなく、甘粛省のようにすでに民国時代に劇団や歌舞団が存在していた地域では、そうした団体を母体として歌舞団が組織された場合もあるとみられるが、そこに最初から音楽組織があったかどうかはまだ不明である。

省の歌舞団はオーケストラだけでなく、多くの場合劇団、バレエ団、民族舞蹈団、民族楽団、歌劇団、合唱団などの舞台芸術機能の多くまたはいくつかを包摂している組織で、このためオーケストラも単独での演奏団体と言うよりは多様な伴奏を主な任務としていた。この場合のオーケストラは、多くの場合「省歌舞団管弦楽隊」と称した。

ただ、広東省と上海市においては、広州楽団、上海交響楽団が独立した組織として存在していた。歌舞劇院の機能をもつ組織は別にそれぞれ広東歌舞劇院（1949 年に華南文工団として設立）、上海歌劇院（1935 年設立の新安旅行団を前身とし、1956 年に設立）があり、後者にはオーケ



表 1 各省・直轄市におけるオーケストラの展開（一部）

創立		主な改組・改称			現在の名称への改称や、企業化など	
年	名称	年	名称	年	名称	年
(省)						
1956	安徽省歌舞団管弦楽隊			2003	安徽省歌舞劇院交響楽団	2010 安徽楽団交響楽団（安徽交響楽団）に改組、歌舞劇院から独立
1956	福建省民間歌舞団	1958?	福建省歌舞団管弦楽隊			1985 福建省歌舞劇院交響楽団（福建交響楽団）
1939?	甘肅省歌劇団管弦楽隊	1961	甘肅省歌劇院交響楽団			2016 甘肅交響楽団
1958 (54?)	広西歌舞団	1978	広西歌舞団管弦楽隊			1996 広西歌舞劇院広西交響楽団
1957	広州楽団					1997 広州交響楽団
1956	貴州省歌舞団					1995 多彩貴州交響楽団（同時に貴陽市歌舞団楽団を合併）
1957 (54?)	河北省歌舞団	1967	河北省交響楽団	1984	河北省歌舞劇院交響楽団	2000 河北交響楽団
1954	黒龍江省歌舞団管弦楽隊	1957	哈爾浜市歌舞劇団管弦楽隊	1971	黒龍江省歌舞劇院管弦楽隊が独立	2012 黒龍江省演芸集団として有限責任公司化
1957	河南省歌舞団	1967	河南交響楽団	1996	河南省歌舞劇院河南交響楽団	2009 河南交響楽団（河南歌舞演劇集団として有限責任公司化）
不明	湖北省実験管弦楽団	1958	湖北省歌舞劇院交響楽団			2010 湖北交響楽団
1953	湖南省歌舞団			1993	湖南省交響楽団	2012 湖南省歌舞劇院として有限責任公司化
1954	吉林省交響楽団					2012 吉林省民族楽団を吸収
1956	江蘇省歌舞団	1978	江蘇省歌舞団管弦楽団	1995	江蘇省歌舞劇院交響楽団	2001 江蘇省演芸集団として有限責任公司化
1957	江西省歌舞団管弦楽隊			2000	江西省歌舞劇院交響楽団	2012 歌舞劇院として有限責任公司化
1951	東北人民芸術劇院管弦楽隊	1954	遼寧人民芸術劇院管弦楽隊			1979 遼寧交響楽団
1946	内蒙古歌舞団管弦楽隊					1985 内蒙古民族歌舞劇院交響楽団（内蒙古交響楽団）
1958	寧夏歌舞団			2001	寧夏歌舞劇院交響楽団	2011 寧夏演劇集団として有限責任公司化
1950	青海省民族歌舞劇団管弦楽隊					2003 青海省民族歌舞劇院交響楽団
1958	山東省歌舞団管弦楽隊			1986	山東歌舞劇院交響楽団	2012 山東演芸集団として有限責任公司化
1952	山西省政府音工室管弦楽隊			1984	山西省歌舞団管弦楽隊	2011 歌舞劇院全体として有限責任公司化
1957	陝西省楽団	1963	陝西省歌舞劇院楽団	1980	陝西省楽団	2009 陝西演劇集団として有限責任公司化、陝西フィルハーモニー楽団と改称
1956	新疆歌舞団管弦楽隊					1996 新疆フィルハーモニー楽団（新疆芸術劇院フィルハーモニー楽団）
1953	四川省歌舞劇院管弦楽隊					2002 四川交響楽団
1958	チベット自治区歌舞団管弦楽隊					2002 チベットフィルハーモニー楽団
1956	雲南省歌舞団	1970	雲南省歌舞団交響楽隊	2003	雲南省歌舞劇院交響楽隊	2010 昆明聶耳交響楽団（成立時に昆明市民族歌舞劇院楽団を合併）
1957	浙江民間歌舞団管弦楽隊			1988	浙江歌舞団管弦楽団	2008 浙江交響楽団
(直轄市)						
不明	北京歌舞団交響楽団					1977 北京交響楽団
1953	重慶市歌劇院					2007 重慶交響楽団
不明	天津歌舞団管弦楽隊	1959	天津人民歌舞劇院楽団	1964-78	歌舞団と歌劇団に分離、楽団も分割	1985 天津交響楽団
1945	上海市政府交響楽団	1949	上海市人民政府交響楽団			1956 上海交響楽団

ストラも属している。

## ②歌舞劇院への改組と「文化大革命」

表 1 にみられるように、1960 年ごろから「歌舞団」を「歌舞劇院」に改称・改組する動きがはじまり、1990 年代まで続く。この改称・改組のそれぞれにおける理由はまだ明らかにできていないが、この時期に省歌舞団と省内の市歌舞団との整理統合・再編が行われているケースがみられるので、そうした組織変更が背景にあるとみられる。たとえば、早い段階でこうした再編を行った黒龍江省では 1957 年に芸術上演団体のプロフェッショナル化を調整する国家の方針をうけてハルビン市歌舞団と黒龍江省歌舞団が合併してハルビン市に属するハルビン歌舞劇団が発足し、1959 年にはハルビン歌舞劇院と改称している (刘, 2008, pp.103-104)。

1960 年代にはいと政治的な動きが激しくなり、特に「文化大革命」がはじまったとされる 1966 年ごろからオーケストラがとりあげる曲目に変化が生じたほか、組織的にも混乱や弾圧が起こったことが記述されている (刘, 2008, pp.103-104, 上海交响乐团, 2009, pp.95-96)。こうした混乱は、1976 年に「文化大革命」の終結が宣言されても尾をひいており、たとえば上海交響楽団では、1975 年には海外公演を行うなどしているものの、上海での西洋クラシック音楽の演奏が再開されたのは 1978 年の 2 月である (上海交响乐团, 2009, p.96)。

## ③地方オーケストラの展開—陝西省楽団を事例に

ここでは陝西省乐团<交响 50>编辑委员会 (以下「编辑委员会」) (2007) をもとに、1957 年に設立された陝西省楽団を例としてとりあげる。もちろん同団の本拠地である西安は地方とはいえ重要な大都市であり、また当初独立したオーケストラとして発足し後で歌舞団と統合されたという点で、多くの地方オーケストラの典型とは必ずしもいえない。しかし上海やハルビンなどと異なり、西安では建国以前には有力なオーケストラが存在しなかったとみられるため、オーケストラの基盤が乏しかったと言う点では、他の多くの省レベルのオーケストラと共通している。そうしたオーケストラの展開についてこの資料により活動の詳しい様子がわかるので、紹介しておきたい。

同楽団は、1948 年に設置された人民解放軍第 19 軍文工団が 1950 年に陝西軍区文工団となり、そのなかの音楽組織部分が 1957 年 4 月 10 日に陝西省管弦楽団と改称した。中央楽団、上海交響楽団、広州楽団とともに、もっとも早く生まれたプロフェッショナルの交響楽団であるとされる。その後も名称の変遷は続き、陝西省音楽団 (1960)、陝西省楽団 (1963)、陝西省歌舞劇院楽団 (1963) そして再度陝西省楽団となるのが 1980 年である。

設立時、文工団団員は 27 人で後に省戯曲劇院から 7 人が派遣された。当初数年間は、楽団員が北京で開かれたソ連国立交響楽団の演奏会にわざわざ赴くなど、学びながら演奏するとい

うものであった。設立初年の演奏としては、舞劇「春節序曲」の伴奏や、ソ連音楽の放送用演奏、さらに冬には職場の慰問など巡回演奏を20カ所以上で行っている（編集委員会、2007, pp.2-3）。

1960年代にはいと、音楽学校から人材が豊富に供給されるようになり、音楽団体も多く設立された。そうしたなかで1962年に陝西省労働者文工団と陝西音楽団が合併し21人が楽団員に加わるなどがあり、1963年4月、設立6周年の名簿では、団長以下マネジメントが10人、演奏者は交響楽団78人、民楽団45人、合唱団52人という規模となっていた。このことで大規模な西洋クラシック作品の演奏が可能となり、同年前半の演奏会ではシューベルトの未完成交響曲、ベートーヴェンの交響曲第1番、ドヴォルザークの新世界交響曲などが取り上げられている（編集委員会、2007, pp.9-13）。そしてさらに1963年9月に陝西省歌舞団、西安市歌劇団と陝西省楽団が合併し、陝西省歌舞劇院が発足した。改組があいついだのは、1960年代初頭に楽団の発展が低調であることを憂慮した关鹤岩・元団長が省文化局の鱼讯局長と話し合った結果であるという（編集委員会、2007, pp.132-133）。

1965年には抗日戦争勝利20周年で革命歌曲音楽会なども開いている。その後、「文化大革命」の混乱にオーケストラもまきこまれていき、文革期間中は「白毛女」など「革命模範劇」の舞台芸術作品を中心に演奏しているが、1972年には日本の松山バレエ団が西安で公演した際に伴奏を務めている（編集委員会、2007, pp.134-135）。

本書では、文革期の記述は多少あるものの、1970年代についての記述はほとんどなく、1980年に再度陝西省楽団として独立して以降について再び記述が多くなる。このことから文革体制の停止から活動の正常化までには1970年代いっぱいを経験したのではないかと推察される。

### (3) 各種の伴奏楽団や民族楽団などの設立

他方、1950年代ごろには放送局のオーケストラや、映画製作所、バレエ団などにも専属のオーケストラが設立された（表2）。これらのオーケストラでは当然、音楽コンテンツの録音や

表2 放送局、映画製作所などのオーケストラ（一部）

創立		主な改組・改称				現在の名称への改称や、企業化など	
年	名称	年	名称	年	名称	年	名称
1959	北京舞蹈学校実験バレエ舞劇団管弦楽隊					1963	中央バレエ団交響楽団
1952	中央戯劇学院付属歌舞劇院管弦楽隊			1956	中央楽団を分離	1979	中央歌劇院交響楽団
1947	東影音楽組					1955	長春映画製作所楽団（長影楽団）
1950	上海放送楽団			1996	上海映画楽団（1954設立）を合併	2004	上海フィルハーモニー楽団
1973	四川省楽団管弦楽隊	1973	峨眉映画製作所楽団	2001	四川放送交響楽団	2005	四川フィルハーモニー楽団
1960	中国放送文芸工作団管弦楽隊	1962	中国放送管弦楽団	1980	中国放送交響楽団	2000	中国フィルハーモニー楽団
1972	珠江映画小楽隊					1978	珠影楽団

伴奏が主要な業務であったが、西洋クラシック音楽や中国で作曲されたオーケストラ曲をとりあげた演奏会を開くこともまれではなかった。

たとえば上海映画楽団は、1956 年に 50 人のオーケストラと 9 人の民族音楽グループで設立された。毎年 20 本近い長編をはじめとする多くの映画に伴奏をつけているのはもちろんであるが、有名なオーケストラ曲である「紅旗頌」などの音楽作品の創作も行い、交響音楽会の開催、「上海の春」音楽祭への出演、放送番組への出演、レコードの録音なども行っている（上影乐团，1986）。こうした楽団にはほかに、中国映画楽団、長春映画製作所楽団などがあり、比較的新しいものに 1972 年設立の珠江映画製作所楽団がある（珠影樂團，1992）。

放送局のオーケストラとしては、冒頭にふれた中国フィルハーモニー楽団の母体であり、1960 年に中国放送文化工作団管弦楽隊として設立された中国放送交響楽団などがある。ただ 2000 年前後に北京と上海で放送局のオーケストラと映画製作所のオーケストラが大規模に再編されており、この経緯についてはあらためて詳説したい。

さらに、第二次大戦後の中華圏で新たに生まれた音楽の演奏スタイルとして民族楽団（香港や台湾などでは中楽団という）がある。民族楽団は、中国の伝統音楽の楽器を西洋オーケストラ的に配置し、現代作曲家が作曲した作品や、伝統音楽・民謡、さらには西洋クラシック音楽の曲をこうした楽団の楽器配置に編曲したものをとりあげて演奏するものである。中国の伝統楽器では不足する音色・音域に対しては西洋楽器で補強する場合もある。こうした楽団としては、中央楽団民族楽隊、上海民族楽団などがあげられる。たとえば上海民族楽団は、1952 年に上海楽団の民族管弦楽隊として市政府により創設された。その後 1956 年に上海楽団の解散に伴って上海民族楽団として独立し、「上海の春」音楽祭への出演などの活動を行っている。1962 年には「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ音楽会」を開催するなど、「中国音楽」だけでなく「民族音楽」の演奏にも挑戦している（上海民族乐团，2002）。

## お わ り に

中国ではもともと、音楽は六芸の一つとされ知識人必須の教養に含まれるなど、音楽の位置づけがヨーロッパはもちろん日本とも異なっている。西洋オーケストラの導入において考える場合でも、中華交響楽団の設立に際して礼楽との関係でその位置づけが述べられたことがある（丸山，2010，p.109）ように、そうした違いについて無視することはできない。中華人民共和国のオーケストラの展開をふりかえると、日本の感覚からすれば音楽の政治利用がすぎるという印象をうけ、共産党の文化統制という側面から問題をとらえがちである。しかし、音楽の政治的な位置づけを西洋的なオーケストラに与えたことが、建国後 10 年程度の短期間に大半の省でオーケストラを含む歌舞団が組織されたことや、「文化大革命」期にも革命劇や革命音楽

の演奏という形でオーケストラが生き残ったことと大きく関係しているとみるほうが自然である。

ただ、そうした政治とオーケストラの関係も、中国の政治的社会的情勢によって変化していくのはもちろんである。1970年代以降の「改革開放」そして国有企業民営化による怒濤のような変化は、各省のオーケストラの企業化や民営オーケストラの誕生を生み出した。次稿では、そうした変化の経緯をたどるとともに、歴史的背景と現在の政治状況をふまえて現在の中国におけるオーケストラ経営の特徴と課題について整理する予定である。

なお本稿は2013年度～2016年度、科研費基盤研究C、課題番号：25370192「オーケストラ経営の課題と展望－東アジア地域における比較研究を通じて」による研究の一環である。

#### <注>

- 1) 上海の英字紙 North China Daily に広告が掲載された1879年を設立年とする文献等もみられるが、1857年、1871年、1881年とする資料もあるという（上海交响乐团，2008，pp24-25）。
- 2) 作曲家、音楽教育家（1884-1940）。日本に留学し、また後にドイツにも留学。中国におけるもっとも初期の西洋音楽家の一人。
- 3) 当時の文書の一部にはさんずいのない「哈爾賓」との表記がある。
- 4) 1927年11月には、南京国民政府によって国立上海音楽院が設立されている。
- 5) 作曲家、ヴァイオリニスト、指揮者（1912-1987）。
- 6) 「文工団」は「文化工作団」の略。「工作」とは日本語と異なり中国語では「作業」「業務」という一般的な意味である。また文工団や同様の組織は現在でも軍におかれているが、単なる軍楽隊や兵士によるアマチュア楽団ではなく、現在でも音楽や演劇、舞踊など各種の舞台芸術を上演する歌舞団と同様のプロフェッショナルの組織であり、兵士への慰問や一般国民への軍のPRの役割を果たしている。

#### <参考文献>

##### 文献

(中文)

- 卞祖善（2011）『2010中国西部交响乐团回眸』中国文联出版社  
编辑委员会（1999）『中国电影乐团建团五十周年』表記なし  
梁茂春（主編）（2010）『中国交响音乐博览』人民音乐出版社  
刘学清（2008）『哈尔滨交响乐团百年1908-2008』上海音乐学院出版社  
陕西省乐团交响50编辑委员会（2007）『交响50 陕西省乐团成立50周年纪念』陕西省乐团  
上影乐团（1986）『上影乐团三十年』上海電影乐团  
上海交响乐团（2009）『上海交响乐团一百三十周年』表記なし  
上海民族乐团（2002）『上海民族乐团建团五十周年纪念画册』表記なし  
周光蓁（2009）『中央樂團史』三聯書店（香港）  
珠影樂團（1992）『珠影樂團建團20周年纪念』表記なし

（和文）

岩野祐一（1999）『王道楽士の交響楽 満州一知られざる音楽史』音楽之友社

榎本泰子（1998）『楽人の都・上海』研文出版

榎本泰子（2006）『上海オーケストラ物語』春秋社

前田哲男（2006）『戦略爆撃の思想 ゲルニカ 重慶 広島 新訂版』凱風社

（英文）

Melvin, Sheila and Jindong Cai(2004)"Rhapsody In Red", Algora

論文・署名記事

（中文）

陈培一（2000）「冲出津门看“天交”——天津交响乐团白描」『中外文化交流』2000年3期

陈正府（2010）「贵阳交响乐团：民营资本催生“文改”新模式」『当代贵州』2010年5期

贵州省音协音乐史志编写组（2000）「贵州近现代音乐活动概述」『贵州大学学报・藝術版』2000年3期

罗雪莱（2016）「简述西藏交响乐的历程及对其发展的思考」『西藏芸術研究』2016年1期

石砥（2011）「我省交响乐团的现状及发展」『北方音乐』2011年6期

天津市地方志编修委员会办公室・天津市文化局编（2004）「第四編 音楽 第三章 音乐表演团体 第一节 专业音乐表演团体」『天津通志・文化艺术志』（ウェブ版を参照）

学源（2003）「喜看交响乐民族化在云南」『民族芸術研究』2003年S2期

杨增建, 唐彩萍（2000）「河南省歌舞剧院：开拓演出市场 发展艺术产业」『决策探索』2000年第3期

周建国（1996）「新疆民族歌舞四十年」『新疆芸術』1996年5期

（和文）

丸山貴士（2010）「1940年代・臨時首都重慶における西洋音楽—中華交響楽団の軌跡」『現代中国』第84号

新聞・雑誌等無署名記事

「辽宁人民艺术剧院」『党史纵横』2008年10期

「放歌改革开放，弘扬民族艺术—广西歌舞团40周年团庆纪实」『歌海』1994年4期

「河北省歌舞剧院有限公司」『河北画報』2014年11期

「美妙的歌舞 迷人的艺术—四川省歌舞剧院简介（上）」『音乐世界』1995年9期

「福建省歌舞剧院」『中外文化交流』1997年第6期

ウェブサイト（特記ないものは、各団体の紹介ページまたはトップページ）

安徽乐团 <http://www.ahyanyi.cn/zhishu/yt/about/>（2016年10月6日閲覧）

长影乐团 <http://www.cyytchina.com/page/html/culture.php>（2016年10月6日閲覧）

重庆市歌剧院 <http://www.cqopera.com/col.jsp?id=101>（2016年10月6日閲覧）

福建省歌舞剧院 <http://www.fjdjy.com/fjsgwjy/>（2016年10月6日閲覧）

甘肃省（甘肅交響楽団設立の報道） [http://www.gansu.gov.cn/art/2016/3/10/art\\_36\\_266441.html](http://www.gansu.gov.cn/art/2016/3/10/art_36_266441.html)（2016年10月6日閲覧）

广东歌舞剧院 <http://www.gdgdjy.com/Overview.asp>（2016年10月6日閲覧）

贵州文化演艺集团（貴州省歌舞劇団の紹介） [http://www.gzacp.cn/Pages/Help\\_Center/Help\\_Center.aspx?menuid=7&id=8](http://www.gzacp.cn/Pages/Help_Center/Help_Center.aspx?menuid=7&id=8)（2016年10月6日閲覧）

黑龙江省演艺集团 <http://www.ylonw.com/index.php/article/index?id=1>（2016年10月6日閲覧）

河南歌舞演艺集团 <http://www.hngwyyjt.com/about.asp>（2016年10月6日閲覧）

湖南省歌舞剧院 <http://www.hnsgwjy.com/about/?29.html>（2016年10月6日閲覧）



- 江苏省演艺集团 <http://www.jsyanyi.cn/gjsy.aspx> (2016年10月6日閲覧)
- 江苏省演艺集团交响乐团 <http://www.jsyanyi.cn/jxsy.aspx> (2016年10月6日閲覧)
- 江西省歌舞剧院 [http://www.jx.jxgw.cc/comcontent\\_detail.html](http://www.jx.jxgw.cc/comcontent_detail.html) (2016年10月6日閲覧)
- 吉林省交响乐团 <http://www.jljxyt.com/index1.asp> (2016年10月6日閲覧)
- 昆明聂耳交响乐团 <http://www.kmsymphony.com/about/culture.html> (2016年10月6日閲覧)
- 蘭州交响乐团 <http://www.sin80.com/artist/lanzhou-symphony-orchestra#bio> (2016年10月6日閲覧)
- 青海省人民政府（青海省民族歌舞剧院（团））<http://www.qh.gov.cn/mzfw/system/2012/11/13/010010172.shtml> (2016年10月6日閲覧)
- 山东演艺集团 [http://www.sdpag.com/newslist\\_1\\_1\\_5.html](http://www.sdpag.com/newslist_1_1_5.html) (2016年10月6日閲覧)
- 上海爱乐乐团 <http://www.shphilharmonic.com/Summary.aspx> (2016年10月6日閲覧)
- 山西省歌舞剧院 <http://www.sxsgwjy.cn/jyjs/jyjj/index.html> (2016年10月6日閲覧)
- 四川爱乐乐团 <http://www.spo1973.com/About.aspx?id=1> (2016年10月6日閲覧)
- 天津交响乐团 <http://goingstore.com/ytjj.html> (2016年10月6日閲覧)
- 天津市文化局 <http://www.tjwh.gov.cn/whysz/0704yinyue/yinyue-0301.html> (2016年10月6日閲覧)
- 云南省歌舞剧院 <http://m.yngewu.com/introduction/&contentId=168.html> (2016年10月6日閲覧)

## Orchestras in China, from Settlements to the Cultural Revolution

Koichi Kondo \*

### Summary

In the first stage of orchestras in China, three small bands were predecessors - The Shanghai Public Band (established in 1870s), The Hart Band in Beijing (1886) and the Railway Club Orchestra of Chinese Eastern Railway managed by Russia in Harbin (1908). These bands were developed to orchestra after the Xinhai Revolution - The Shanghai Municipal Orchestra (1922), Beijing University Orchestra (1923) and Harbin Symphony Orchestra (1935). But chinese musicians were not permitted to join as full-time player in Shanghai and Harbin.

First professional and full size symphony orchestra established by the government of the Republic of China and formed by chinese musicians was the China Philharmonic Orchestra in Chongqing (1941). Under severe indiscriminate bombing by japanese forces, this orchestra played many concerts for chinese people with western classic music and original modern chinese pieces.

After founding the People's Republic of China, governments of state and provinces built up cultural performing groups as soon as possible for not only communistic propaganda but also cultural development of people. Before the Cultural Revolution decade they played western classical music and chinese modern symphonic music as often as revolutionaly and patriotic music. But they were permitted to play only revolutionaly "Model Theater" pieces in the Cultural Revolution decade.

### Keywords:

Orchestras in China, Shanghai Symphony Orchestra, Harbin Symphony Orchestra, China Philharmonic Orchestra, Central Philharmonic of China

---

\* Professor, College of Business Administration, Ritsumeikan University